仲間との絆†天空の星†

星羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仲間との絆†天空の星†

【Ｎコード】

Ｎ００３８Ｏ

【作者名】

星羅

【あらすじ】

少年ユウと、超方向音痴の少女スバル、それから頼もしい幼なじみのタクヤの、「天空の星」と呼ばれるポケモンを探す物語……。

方向音痴と幼なじみ

隣には、いつもお前がいた。

お前は時々、悲しそうな顔をするから、俺は側で笑ってやる。

そうすると、お前はいつも嬉しそうに笑っていたっけ――

でも、俺は身体が弱いから、いつもお前の前で倒れて、心配かけてる。

そのときのお前の顔は、本当に悲しそうで、悔しそうで……。

そんな身体が弱い俺の夢は、「ポケモンマスターになる」こと。

ある日、俺は決めた。

「俺はいつか、ポケモンマスターになってやる！」

「……」

「そんでさ、身体が弱いのも治す！！……お前にはもう、悲しい思いはさせたくないから」

「……」

「たとえ身体が弱くても、夢は諦めたらいけないよな！お前も、手伝ってくれる？」

「……ピカッチュ！」

それは、幼い頃に交わした、お前との約束……。

あれから四年……。

「うわーっ！！遅刻するってー！！」

『だから早く起きろって言ったのに……』

「仕方ないだろ！？昨日は夜遅くまでラジオを聴いてたんだから！」

『そもそも夜更かしすること自体が間違ってる』

「うぅ……」

階段から慌ただしく下りてきた少年は、急いで着替えながら朝食であるトーストを口にくわえる。かなり慣れた手つきなので、この状態は日常茶飯事なのだろう。

そんな少年の隣に並走する形で側にいるのは、黄色の身体に赤い電気袋、ギザギザの尻尾と長い耳の愛くるしい姿の生き物だった。

名前はチュウタ。少年が付けた名前である。もともとは、ピカチュ

ウと呼ばれていたポケモンだ。

「チュウタっ、お前の冷静さを俺に分けてくれー！！」

『無理だ。自分でなんとかしろ』

「ひどっ！そんな風に育てた覚えはないぞ！」

『育てられた覚えもないな』

なぜかポケモンであるチュウタと少年が会話できている。普通なら絶対にありえないのに。

少年は、ポケモンと話すことができる。他の誰も、少年と同じようにポケモンと会話することができないのだ。

「チュウタ……お前絶対れいせいな性格だろう……」

『今頃気づいたのか。昔からずっと一緒にいてこのザマ……頭が痛くなるぞ、ユウ』

「あぅ……」

ユウと呼ばれた少年は、弁解もできずにいる。まさにチュウタの圧勝だった。
ユウは、カントー地方に住んでいる十三歳の少年だ。すでにポケモントレーナーとして旅をした経験もある。

小柄で華奢な体格をしており、顔は童顔で女顔、髪は薄い茶色で肩までの長さ、一見少女と間違うくらいだ。

しかし、ユウの口調はまさにやんちゃな少年のもので、そのためか女の子に間違えられることは少ない。

一年前まではカントー地方を旅していたが、訳あって故郷であるトキワシティに帰って来ている。

「でもさぁ、なんでオーキド博士は俺を呼んだんだ?」

『さぁね。一番扱いやすいからじゃないのか？』

「お前……何気に酷いね……」

『今に始まったことじゃないだろ』

「確かに」

口を動かしながらも、せっせかと出かける準備をしている。しかし、普通は前日に用意しておくものなのでは、とチュウタはひっそりと心の中で疑問を抱く。

その間にも準備は終わり、やっと家から出ることができた。ちなみに両親は遠い地方で出稼ぎに出ている。そのためユウは一人暮らしだ。

扉を開けると、すでに高く昇っている太陽の光が視界を遮る。あまりの眩しさに、顔の前に手をかざしたほどだ。

歩き出したユウの頭にチュウタが登る。身体は小さくてもそれなりの重さがあるので、多少首が痛い。

「……自分で歩けよな」

『嫌だ、地面が熱い』

「おい……」（怒）

『オレはデリケートなんだ。これくらいいいじゃないか』

結局、口で勝てなかったユウはそれなりに重いチュウタを頭に乗せたまま、オーキド博士のいるマサラタウンに向かった。

マサラタウンまではたったの三時間。されど三時間だ。やはりそれなりに距離はある。

ふと、ユウはあることを思い出した。

「なぁ」

『なんだ？降りないぞ』

「いや、そーじゃなくて……今さらなんだけどさ」

『ん？』

「ピジョスケに乗っていけばいいんじゃないかな～って……」

『……馬鹿』

「うっ……と、とりあえずピジョスケを出すか！」

ごまかすようにリュックの中から一つのモンスターボールを取り出し、空中に向かって投げた。

中から出てきたのは、見事な翼を持ったポケモン、ピジョットだ。
明らかに不機嫌そうである。

「あ～……ピジョスケ、俺をマサラタウンまで乗せてくれないか？」

『はぁ？なんでおれが？嫌だね』

「そこをなんとか……」

『ふんっ、だいたいおれのことを忘れてたくせに、何様のつもりだ』

「ダメ……か？」

『……ま、まぁ…お前がどうしてもって言うなら、乗せてやってもいいぞ……？』

『相変わらずの意地っ張り……』

『なんだと！？』

チュウタのうんざりしたかのような呟きを、ピジョスケは耳聡く捉えていた。

この二匹は、昔から仲が悪い。タイプの相性もあるのだろうが、性格自体がまるっきり合わないのだ。

『ふ～ん、お前の耳は地獄耳か？ハト野郎』

『誰がハトだっ！すでにハトからは卒業したっつーの！そう言うお前こそ、相変わらずの毒舌っぷり。さすがだな、どぶネズミ』

「お前ら、本当に仲悪いよな……」

トレーナーとしては、手持ちポケモン同士は仲良くしてほしいもの

なのだが、知ってか知らずかこの二匹はとにかく喧嘩する。酷いときは他の手持ちポケモンまで巻き込まれる始末だ。

「お～いお前ら、そろそろ本格的に時間がヤバいんだけど……」

『ちっ、この決着は次の機会でつけてやるよ』

『その台詞、そっくりそのまま返すぜっ！さぁユウ！行くならぱっぱと行くぞ！』

「あ……うん。ありがと」

そのままよいせ、とピジョスケの背中に乗り、しっかりと首元に掴まる。こうでもしないと落ちてしまいそうだからだ。

それを確認したピジョスケは、大きな翼をバサバサと羽ばたかせ、飛び上がった。

ある程度の高さまで上昇したら、ピジョスケはマサラタウンに向けてかなりのスピードで飛んでいった。チュウタは風圧で飛ばされな

いように必死である。

ピジョスケの背中から見た景色がくるくると変わり、あっという間にマサラタウンが見えてきた。ピジョスケに乗れば、歩いて三時間かかる道のりも数十分程度である。

マサラタウンを上空から見て、ユウはふととある民家に目を向けた。ただ、何となくだが。

その民家には、幼なじみが住んでいる。自分よりも三歳も年上だ。今は十六歳。

とりあえず下に降りて、一息ついた。チュウタほどではないが、ユウもあの風圧に疲れてしまったのだ。

ちらりと腕時計を見てみると、すでに約束の時間から三十分は過ぎていた。あのまま歩いていたら、これよりもさらに悲惨だっただろう。

「三十分くらい大丈夫だよな！たった三十分だもんな！」

『たかが三十分、されど三十分……』

「え……チュウタ？」

『オーキドのじいさんは時間に厳しいからな……叱られるぞ～』

「ピジョスケうるさい！戻れっ」

『はいはい』

おとなしくボールに戻ったピジョスケ。そのため今はユウとチュウタの一人と一匹だけだ。

「さて……オーキド博士の研究所ってどこだったかな」

『多分こっちだぞ。覚えてる』

「サンキュ」

ユウとチュウタはオーキド研究所を目指して歩き始めた。やはりチュウタは頭の上に乗ったままだったが。

しばらく歩いていくと、やっと見慣れた建物を発見した。オーキド研究所だ。

一年ぶりに見た研究所は多少汚れが目立っていたが、記憶のものとそう変わらなかった。

「あ、ここだ」

『覚悟はできてるのか？怒られるんだろ』

「はいはい、どうせ怒られますよ」

投げやりになりながら扉に手を伸ばそうとしたとき、内側からいきなり扉が開いた。それもかなりの勢いで。

ユウはとっさに後退したが、その反動でチュウタが頭からずり落ち、扉に直撃した。

『ふぎゃっ！！』

「あ……」

扉を開けたのは、白髪をワックスで固めたような髪型をした気難しそうでありながらもどこか優しさを漂わせた老人だ。

この人こそが、ポケモンの研究で有名なオーキド博士である。なにやら少し慌てているようだ。

しばらく目の前にいるユウを不思議そうに眺めていたが、ようやくユウと気づき、笑顔を向ける。

「おお、ユウ！待っておったぞ！」

「あ、その……オーキド博士……遅刻してすみません」

オーキドに向けて頭をペコリと下げると、オーキドは困ったような笑みを浮かべてから頭をかいた。どうやら怒ってはいないらしい。

心中ほっとしながらも、オーキドの困った笑顔が気になった。

「何かあったんですか？」

「いや……実は君の他にもう一人呼んでいたんだが……まだ来ないんじゃよ」

「俺以外に？俺が呼ばれたのと、何か関係があるんですか？」

「うむ……それは――」

オーキドが何かを喋ろうとしたとき、どこからか低く呻くような声が聴こえた。声の発生源は……オーキドが勢いよく開けた扉からだった。

『ふぎゅぅ……』

「ん……？……あぁぁぁ～っ！チュウタっ！！オーキド博士っ、扉にチュウタが挟まってます！！」

「それはすまなかった。悪気はなかったんじゃ」

オーキドが押さえていた扉をゆっくりと引っ張ると、チュウタがポロリと落ちてくる。抱き抱えて顔を見てみると、鼻をしたたかぶつけて赤くなっていた。つぶらな瞳には涙が溜まっている。

「大丈夫か……？」

『くっそ～……オーキドいつか殺ス』（怒）

「うっわ……めっちゃくちゃ怒ってるし」

オーキドにはチュウタの言葉が分からないので、チュウタの不穏な台詞はユウだけが聞いた。分からない方が幸せかもしれない。

話が途中になってしまったため、どうやって話を切り出せば良いか分からなくなってしまった。

すると、ユウの背後から少女のものと思われる声が聴こえてきた。

「あれ？オーキド研究所って、ここで合ってるのかな……あっ、オーキド博士だぁ！！」

「え？えっ？誰？」

疑問符を飛ばしまくっているユウに比べて、オーキドの額には青筋が浮かんでいる。怒っているようだ。

てくてくと近づいてくる少女は、まだ十歳かそこらで、大きな青い瞳と同じく青い髪をしている。腰まで伸びた髪は、耳の前でみつあみにされていた。

一見かなりの美少女だが、格好はかなりボーイッシュに近い。白いシャツの上に袖無しベストを着て、下はショートパンツだ。

何やら汗ぐっしょりだが、その理由はすぐに分かることになる。

「スバル……君はどんだけワシを待たせるんじゃ！約束の時間から三時間も経っているじゃないか！」

「うわっ……三時間も……」

『ハト野郎に乗って来なかったら、お前も似たようなもんだろ』

「チュウタうるさい」

ヒソヒソとユウ対チュウタの舌戦が繰り広げられている背後では、スバルと呼ばれた少女がオーキドに叱られていた。

「だいたい、君の家はここから十分程度じゃろう？すぐに着くじゃないか」

「迷いました！」

「……はぁ…そうじゃないかとは思っていたが、まさかこれほどまでとは……」

がっくりと肩を落としながら、オーキドはスバルを眺める。

おそらく、スバルの遅刻の原因である「迷った」は真実であろう。ここから家までの距離はともかくとして。

彼女が汗でぐっしょりなのも、あちこちを走り回ったからなのであろう。

今だに事態が飲み込めていないユウは、チュウタとの舌戦を中断して、思いきってオーキドに尋ねた。

「オーキド博士……どういうことですか？」

「うむ……彼女はスバルといって、今日トレーナーになるんじゃ。そして、旅に出るらしい」

「へぇ」

「でも……スバルは方向音痴なんじゃ」

「……は？」

「家から十分かかるこの研究所まで、なぜか三時間以上もかかる」

「うわぁ……それは……」

基本的にポケモントレーナーは、旅をする者が多い。ユウもトレーナーになったときは、カントー地方をあちこち歩き回った。

しかし、スバルほどの方向音痴では、まずマサラタウンから出られるかが怪しい。冗談抜きで。

状況を理解してきたユウは、だんだんとある事に気づいていく。

「まさか、俺が呼ばれたのって……」

「そう……君には、スバルのサポート役として、一緒に旅に出てほしい」

オーキドがすまなさそうに告げる。

しかし当の本人は、きょとんとしながら首を傾げていた。頭の上に「？」が浮かんでいそうな雰囲気である。

ひとまず、研究所の中に入って詳しい話を聞くことにした。さすがにはいそうですか、で済ませられる問題ではないからだ。

研究所の廊下を進みながら、ユウとチュウタはヒソヒソと会話をしていた。

『おい、どーすんだよ？』

「どーするって聞かれてもなぁ……」

『お前、まさか引き受けるなんてことしないよな』

「……多分、引き受けるかも…？」

『……！お前は馬鹿かっ！！』

ユウの耳元でチュウタの張り上げた声が響く。できれば耳元はやめてほしい、耳元は。

他の二人にはチュウタの言葉が分からないので、せいぜい「ピカピカっ！！」としか聞こえていないだろう。

最初は何事かとこちらを向いたが、すぐに興味をなくして視線を逸らす。

しかし、そんなことを気にする余裕は今のユウにはなかった。チュウタが耳元で相変わらず怒鳴っているからだ。

『いいかっ！お前は一年前、何のために旅を中断させたんだっ！！せっかく良くなってきたのに、また逆戻りさせる気かっ！』

「……でも」

『でも、じゃない！！少しはオレの言うこと聞け！お前の身体は——』

「それ以上言うな、チュウタ」

普段とは一変した静かな声音に、チュウタはぴたりと言葉を途切れさす。これ以上言ったら、逆にユウが怒る。

そんなやり取りを、こっそりと伺っている者がいた。スバルだ。

（……この人…何を話してるんだろ……まさか、ポケモンと話ができるのかな……）

そんなスバルの様子に、それ以降沈黙してしまったユウは全く気づかなかった。

かなり長いと錯覚してしまう廊下を渡り終え、ようやく一同は研究室に到着した。そこはかなり広々とした空間で、あちこちに見たことのないような機械が設置されている。

そして部屋の中心に、円形状の土台と、その上にはモンスターボールが三つあった。おそらく、これらがスバルに渡すつもりのポケモンなのだろう。

オーキドはスバルをそこに連れて来て、モンスターボールを一つ手に取った。

「さて……スバル、君が初めて手にするポケモンは、フシギダネ、ゼニガメ、ヒトカゲなんじゃが……まずはフシギダネを見てみようか」

「はい！」

スバルの元気な返事が室内に響き渡る。それを聞いて満足げに頷いたオーキドは、モンスターボールを軽く投げた。

そこから、一匹のポケモンが出てくる。

緑の身体に尖んがった小さな耳、背中には大きな種を背負っており、その表情はにこにこと穏やかだ。

「へー、あのフシギダネはおだやかな性格か」

「えっ、分かるの？」

「顔を見ればだいたいな」

『オレの性格は分からなかったくせに』

痛いところをついてくるチュウタ。しかし、分からなかった理由がある。

チュウタとユウは、ユウがポケモントレーナーになる前からの付き

合いになる。それも、かなり幼い頃から。

いつも一緒にいたせいで、チュウタの性格だけはよく分からなくなっていたのだ。れいせいな性格のはずなのに時々熱くなったり、感情をかなり乱すこともある。

てっきり、きまぐれな性格なのかと思っていたほどだ。

ユウが昔を回想している間に、オーキドはフシギダネをそのままにして次のポケモンを出した。出てきたのは、ゼニガメ。

ゼニガメは水色の身体を甲羅で覆われており、先端がくるりと丸まっている尻尾と丸い頭が特徴だ。

ゼニガメはスバルを物珍しそうに見ている。表情はにこにこと裏のない笑顔で、スバルにかなり甘えたそうにしていた。

そんなゼニガメを見ていたスバルが、くるりとユウの方を見て尋ねる。

「ねぇ、この子はどんな性格なの？」

「えっと……むじゃきだな」

「へー、そうなんだぁ」

ゼニガメを興味津々といった様子で見ているスバルは、かなりのポケモン好きだと思われる。ポケモンに臆することなく手を伸ばし、ゼニガメやフシギダネの頭を撫でくり回していた。

「ふむ、では最後はヒトカゲじゃ。じゃが、コイツはちと問題があってな……」

「は？」

疑問の声をあげたのはスバルではなく、ユウだった。なぜ初心者用のポケモンに、問題があるのだろうか。

オーキドは最後のモンスターボールを手にして、投げた。

そこから出てきたヒトカゲは、朱色の身体に尻尾の先は炎が燈されていて、本当なら人懐っこそうな大きな瞳は、なぜか不機嫌そうに半眼である。

「コイツはかなり気性が荒くてな……ワシでも手に負えないのじゃ」

「でも、かわいいと思うんだけどなぁ」

スバルがヒトカゲの頭を撫でようと手を伸ばすとまだ小さな、それでも鋭い爪でスバルの手を引っ掻いた。慌てて手を引っ込めたスバルだったが、手の甲からはじわりと深紅の雫が滲み出てきている。

「この通り、新米トレーナーの言うことも聞かないし、かと言って他のヒトカゲを連れて来るなんて事もしたくはないから、ずっとここに残されているんじゃよ」

「ずっと選ばれなかったポケモン……か」

「とにかく、スバルにはフシギダネかゼニガメのどちらかで選んでもらった方が良いな。ヒトカゲ、戻るんじゃ」

オーキドがそんな言葉を言った瞬間、不機嫌そうだったヒトカゲの

表情が一瞬だけ悲しそうなものに変わる。

それを見たユウは、ヒトカゲをモンスターボールに戻そうとしていたオーキドを止めて、ユウはゆっくりとヒトカゲに近づいていく。

慌ててオーキドが止めようとするが、すでにユウはヒトカゲのすぐ側まで来ていた。ヒトカゲは警戒しているようで、今にも飛び掛かって来そうである。

「……ヒトカゲ、お前さ……新米トレーナーに選ばれなくて、悲しかったんじゃないか？」

『……！』

驚いたようにヒトカゲは目を丸く見開いた。それはオーキドとスバルも同じで、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている。

そんなことは構わずに、ユウはヒトカゲに話しかけていく。

「何回も何回もトレーナーが来て、それでも自分を選んでくれなくて……ずっと悲しくて、寂しかったんじゃないか？」

『……お前に何が分かるんだ…』

「確かに、俺はお前がその時何を思ったかは分からない。それは、お前だけが分かることだからな」

ユウがそう言うと、ヒトカゲはまた目を見開き、今度は口をぽかーんと開いている。まさか、人間が自分の言葉を理解しているとは思わなかったのだ。

ユウはそんなヒトカゲにそっと手を伸ばし、優しく、壊れ物に触れるように頭を撫でた。

「なんだったら、俺がお前を選んでやる。オーキド博士に頼んでみるからさっ」

『……変わった奴だな、お前』

「良く言われるよ」

苦笑気味に返ってきた言葉。それが、なぜだか荒んでいた心が安らいで……ちょっぴり泣けてきた。

でも、そんな事は絶対言ってやらない。

『おれを選んで、後悔すんなよ』

「ああ。後悔なんて、絶対にしないさ」

『約束だからな……』

それだけを言うとヒトカゲは、そっとユウの手に自身の小さな手を重ねる。それをユウが優しく、力強く握った。

「……オーキド博士、俺にコイツを譲ってください。お願いします！」

「……分かった。そのヒトカゲはユウに譲ろう。ヒトカゲも、心を許したみたいだしなぁ」

こうして、スバルのポケモンが決まる前にユウの新たな仲間が決まってしまった。ニックネームは後日つけることにする。

そこでやっとスバルのポケモン選びが始まった。すでにヒトカゲはユウが譲ってもらったので、残るはフシギダネかゼニガメだけだ。

にこにこと穏やかなフシギダネにするか。

甘えんぼうで無邪気なゼニガメにするか。

散々悩んだ末にスバルが選んだのは……

「よしっ、ゼニガメに決めた！」

「ゼニゼニ～！」

選ばれたゼニガメは大変嬉しそうにしている。今にも跳びはねてあ

ちこちを走り回りそうだ。

一方、選ばれなかったフシギダネは、残念そうな顔をしていたがオーキドに慰められて多少は元気を取り戻した。

「さて……スバルの最初のポケモンも決まったことだし、そろそろ本題に入るぞ？」

「あ、はい」

「本題？」

やっとか、という雰囲気を漂わせているユウと、何の事だか分からないと首を傾げているスバルをそれぞれ見渡しながら、オーキドは言葉を発した。

「まず、さきほど話したサポート役のことなんじゃが、スバルはかなりの方向音痴だから……というものもあるが、ユウにはもう一つ頼みたいことがあったんじゃよ」

「もう一つ……？」

「そうじゃ。ホウエン地方に、願い事をなんでも叶えてくれるポケモンがいる、という噂が流れておってな……それをユウに確かめて、できればデータを取ってきて欲しいんじゃ」

「願い事をなんでも叶える！？すっごーいっ！！」

スバルは無邪気に手を叩いてはしゃいでいるが、ユウは素直にはしゃげなかった。

そんな噂だけの夢のようなポケモンのデータを、どうやって取れというのだ。それに、スバルが旅をするのはカントー地方なので、ホウエン地方に行ったらサポート役云々ができないではないか。

ユウの表情からそれを察したオーキドは、補足を加える。

「ちなみに、スバルはカントー地方ではなくホウエン地方を旅したいと言っていてな。噂のポケモンの方は最初から君に任せるつもりだったから、ちょうどよかったんじゃよ」

「俺を呼んだ本当の理由は……それってことですか」

「そうじゃ。引き受けてくれるか？」

「……いいですよ。できるかどうかは分からないけど、頑張ります」

「ありがとう」

「あの～……」

「「ん？」」

ユウとオーキドが声のする方へ顔を向けると、いまいち状況を理解できていないスバルが片手を挙げていた。質問、という意味だろう。

「なにかな？」

「ずっと気になってたんですけど……この人って誰ですか？」

「ええっ！？いまさら！？」

『とんでもない天然だな』

今までずっと黙っていたチュウタがぽつりと呟くが、ユウも同意見だった。

仕方なく、オーキドが紹介をする。

「彼はユウ。約三年前……いや、もうそろそろ四年になるか……四年前にポケモントレーナーになって、カントー地方のジムバッジを全て集めた実力者じゃよ。君の先輩じゃ」

「えぇっ！？先輩なの！？あたしてっきり同い年かと……」

「……」

『くっくっくっ……言われたな、ユウ』

目尻に涙まで浮かべながら笑っているチュウタをさりげなく睨み、次いでスバルに目を向ける。完璧目が怒っていた。

「俺はユウ！今は十三だが、もうすぐ十四歳になる！あくまでもあんたの先輩だっ！同い年なんかじゃない！」

「あ～……ごめんなさい」

「分かればよろしい！」

ユウは身長が低いことと童顔をかなり気にしており、それを指摘されるとかなり怒る。

オーキドはその事を知っていたので、またか、とため息をついていた。

しばらくしおしおとうなだれていたスバルだったが、何かを思い出したらしく急に顔をガバッと上げる。

「あっ、まだあたしの紹介してなかった！あたしはスバル、好きな事は料理、苦手な事は地図を覚えることっ！よろしくね！」

「あ、ああ……よろしく」

『天然と言うか、立ち直りが早いと言うか……』

なんだか前途多難な気がしてきたユウとチュウタであった……。

それからは、オーキドからホウエン行きの船のチケットを貰ったり、新しいポケモン図鑑を貰ったりした。もちろんスバルの分も。

スバルはオーキドの説明を一切聞かずにゼニガメと遊んでいた。どこまでもマイペースである。

その後はたわいもない会話をしてから、とうとう旅立つときが来た。ユウにとっては二度目の旅立ち……。

「それでは、気をつけて行くんじゃぞ」

「はぁ～い！」

「分かってます」

「船はクチバから出ておる。まずはそこに向かいなさい」

「大丈夫ですよ。俺、このカントー地方を全部まわったんですから」

「そうじゃったな。……噂のポケモンのデータ、待っておるからな」

「はい！」

「行ってきまーす！！」

オーキドに背を向けて、マサラタウンの入り口へと向かう。最初はオーキドに手を振っていたが、そのうちその姿さえも見えなくなってしまった。

「オーキド博士……見えなくなっちゃったね」

「そうだな。……寂しいか？」

「ん～ん、全然！逆にドキドキワクワクで胸がいっぱいだよ！」

「そっか」

ユウ自身も、その感覚は体験したことがある。もうすぐ四年も前になってしまうが。

あのときもオーキドに呼ばれて研究所に行き、そこで古い型のポケモン図鑑と、初心者用のポケモンを貰った。そのポケモンは、自分をきょとんと見上げていて……。

これから始まる冒険の日々に心を躍らせて、旅立ってから一歩目でつまずいてすっ転んだりもした。あの時はものすごく恥ずかしかった……。

そのままトキワシティに行ったらチュウタが不機嫌そうに待っていて、「オレも連れていけ！！」とか言って、無理矢理ついて来たのだ。

つい回想に深く入り込みすぎていたユウは、スバルがこちらを見ていることに気がつかなかった。

「む～……あたしの話聞いてる？」

「……えっ……あ、ごめん。聞いてなかった」

「もうっ！ひどいよ～！」

怒ったような口調だが、語調はあまり怒っていない。ただたしなめているだけに思える。

なんだかその姿がおかしくて、思わず口元が緩んでしまった。

それを見たスバルが、ぷくーっと頬を膨らませてから教師のような口調で。

「人の話はちゃんと聞きましょうって、お母さんに教えてもらわなかったんですかー？」

「ごめんってば。もう一回頼むよ」

「しょうがないなぁ……。あのさ、ユウっていろんなところを旅したんでしょ？」

「いろんなところっていうか……カントーだけだけどな」

「それで、ジムバッジも全部持ってるんでしょ！？」

「カントーのやつだけだけどな」

「それでさ、どんなポケモンを持ってるのかなって思って！」

『カントーの奴だけだけどな』

「お前が言うなっ」

「ん？何か言った？」

「あ、いやいや何でもない！何だったら見せてやろうか？」

「本当！？やったぁーっ！」

無邪気に喜ぶスバルを見ながらも、ユウは背中に冷や汗をかいていた。

スバルはポケモンの言葉が分からない。だからユウがチュウタと話しても、スバルからはただの独り言を言っているようにしか見えないだろう。

だからユウは、ポケモンの言葉が分かると言いたくはないのだ。このことを知っているのは、オーキドと幼なじみの少年だけだ。

そんなことを考えながらも、ユウはモンスターボールからポケモンを出した。

出てきたポケモンはピジョットのピジョスケの他に、シャワーズ、ウィンディ、フーディン、フシギバナがいる。
全員スバルを怪訝そうに見ていたが、スバルはそんなことに構わずテンションが高くなっていた。

「ふわ〜！すっごぉーい！！たくさんいるんだね！」

「ああ。えっと……こっちからピジョスケ、シャワミ、ウィンタ、フーキチ、フシヒコさ！」

「今のって、ニックネーム？」

「そうだよ。みんなにつけてるんだ。……でも、ヒトカゲが入ったから誰かをオーキド研究所に預けないといけないんだよなぁ……」

「えっ！？じゃあ、さっき預ければよかったのに」

「すっかり忘れてたんだよ……。まぁ、パソコンから送ることもできるから問題ないんだけどさ。でも、誰にするかな……」

う〜む、と悩んでいるユウに、手持ちポケモン達は口々に言い募った。こうなってくると、すでに誰が何を言っているのか分からなくなる。

五匹ものポケモンが同時に喋れば、言葉が重なるからそれは当然だ。

かろうじて聞き取れたのは、

『私、手持ちから外れるなんて嫌です！誰か他のポケモンにしてくださる！？』

『なんだとぉ！？オイラだって、ユウと一緒にいたいんだよ！フーキチさんが抜けてよ！！』

『なぜワシが抜けねばならない？年長者は大事にするべきだぞ。だったら、フシヒコが抜ければよかろう』

『え～！？僕は嫌ですよ～！シャワミちゃんが抜けたらどう～？』

『嫌ってさっきから言ってるじゃないですか！！ていうか、その間延びした喋り方、どうにかならないんですの！？聞いててイライラしますわ！』

『なんだと～！？』

といった喧嘩の場面だけであった。チュウタはさすがれいせいな性格なだけあって、ユウの頭の上で喧嘩を見ている。

しかしだんだん喧嘩はエスカレートしていき、挙げ句の果てにはバトルにまで発展してしまった。ユウにとっては日常のことでも、スバルにとってはかなり驚く光景だろう。

どうしたもんかなー、と他人事のような顔をしながら考えていると、頭の上のチュウタがひょいっと地面に下りて、喧嘩している五匹に近づいていった。そろそろだろうか。

ユウがスバルの手を引きながら後退すると、一呼吸後にチュウタの身体から大質量の電撃が放たれた。その電撃は五匹には当たらなかったが、すぐ側の草木が黒焦げになっている。

一方、急に喧嘩を中断させられた五匹は、目を真ん丸に見開きなが

らチュウタのことを見ていた。シャワミはすでに半泣き状態である。
額に青筋を浮かばせたチュウタは、やおら怒号をあげた。

『――いいかげんにしろーっ！！』

『『『『ひえぇぇ～っ！！』』』』

『誰が抜けるか、ユウが選ぶことだ！オレ達が選ぶことじゃない！！』

『『『『はぁーい……』』』』

五匹はチュウタの剣幕に押され、渋々ながら大人しくなった。チュウタはよしっ、とでもいうように頷いている。
チュウタは手持ちポケモンの中ではリーダー的な存在だった。やはり、ユウと一緒にいた時間が一番長いからだろう。
普段は黙って五匹の様子を見ているが、いざという時にはしっかり

と注意をしたり、叱ったりする。他の五匹も、口では言わないがチュウタのことを尊敬しているし、頼りにしたりもしているのだ。

ちなみに、チュウタとよく喧嘩するピジョスケでさえも、心の中ではちゃんと尊敬しているのだ。性格がいじっぱりであるから、なかなか素直になれないだけで。

トレーナーであるユウは、そんな風に解釈しているが、あながち間違いではないと思っている。

「え～っと……じゃあ、ウィンタ。オーキド博士のとこで待っててくれるか？」

『……分かったよ。でもでも！また手持ちに入れてよね！！』

「ああ。絶対だ」

『……ま、ここは新人に席を譲ってやるかな！じゃあね、ユウ！このままオーキド研究所に行くから！！』

「じゃあなー！！」

「あ、あれっ！？勝手に走ってっちゃったよ！いいの？」

会話の内容がわからないスバルには、急にチュウタが電撃を放って「ピカピカッ」と叫び、五匹が大人しくなったと思ったら今度はウィンタがどこかに走り去ってしまったようにしか見えていないのだ。疑問に思うのも仕方ないだろう。

「ああ、ウィンタは自分で研究所に戻ったんだ。後からパソコンで送るよりも、こっちの方が速いしな」

『まぁ、やり切れない気持ちを抑えるために風になって消えた、とも言える』

「おいおい……。…ごほんっ、え～と……とりあえず問題はない！」

「へぇ～、おりこうさんなんだね。ユウのポケモン達って♪」

「……ああ、そうだな」

それは、本当に心の奥底からそう思っている。自分にはもったいないとも感じたりしている。

ふと残った五匹に目を向けると、チュウタとピジョスケが口喧嘩をして、シャワミが日差しにバテて、フーキチがフシヒコと何やら和みながらお茶をすすっている。というか、どこからお茶を出したんだ。

こいつらと一緒にいるのは当たり前になっていて、いつか別れがくると分かっていても、絶対に信じたくはなくて……。

ついつい物思いにふけってしまったユウは、背後から近づいてくる人影に気がつかなかった。

人影はぬぅっと手を伸ばすと、がしっとユウの頭を掴んだ。突然のことにユウは仰天して後ろに振り向いた。相手を見た瞬間、そのまま動きを止める。

そこにいたのは、人懐っこそうな笑顔、ユウよりも頭一つ分以上は高い身長と、ほどよく筋肉のついた身体、そして見知った顔の若者だった。

若者は、ユウの頭に乗せた手でグリグリと頭を掻き回し、最後にぽ

んっと軽く頭を叩く。

「久しぶりだなぁ、ユウ！思ってたよりも元気そうじゃないか！！」

「タクヤ！何でここに！？」

そう、この人物こそ、マサラの上空で見つけた家に住んでいる幼なじみのタクヤだった。最後に会ったのは約二年前だったから、身長もかなり高くなっている。顔つきも、どことなく大人に近づいていた。

「セキチクシティ以来だなぁ！あっはっは、あの頃よりは身長が伸びたじゃないかっ。まぁ、それでもまだ小さいが」

「言うなよっ！そう言うタクヤは、かなりオッサンに近づいたなっ」

「オッサン言うなっ！おれはまだ十七歳だ！」

「あ、そっか。俺がもうすぐ十四歳だから、十七になってるよな」

すっかり思い出話や近況報告に夢中になってしまった二人は、すっかりスバルの存在を忘れている。

ピジョスケとの口喧嘩を終わらせたチュウタがスバルを見てみると、二人のことなど眼中にないのか、フシヒコとフーキチに混ざってお茶をすすっていた。だから、どこからお茶を出したんだ。

スバルの天然っぷりに内心舌を巻いていると、ようやくタクヤがスバルの存在に気がついた。やや遅すぎる気もしないでもないのだが。

「……ん？あの子ってスバル、だよな」

「そーだけど、タクヤ知ってんのか？」

「家が近所なんだ。さっきは森の方に向かっていたけど……」

「あー……多分それは、オーキド研究所に向かう途中だったんじゃないかな」

「……例の方向音痴か」

「やっぱり有名？」

「ああ。先月のことらしいが、自宅に帰ろうとして気がついたら一番道路まで来てしまったらしい。あくまで噂だが……」

「な、なんだそりゃ……」

タクヤの家の近所に住んでいるのだったら、オーキド研究所からもかなり近いはずである。ちなみにオーキド研究所はマサラタウンの南東に建てられており、一番道路は北の方角だ。

そのことから考えると、家とはまったくの正反対に向かって歩いて行ってしまったらしい。なぜそこまで迷うのか、両親でさえも分からないとか。

「昔っから危なっかしかったからな。よくおれが面倒を見ていたんだ」

「俺、知らないけど」

「お前が遊びに来てたときは、毎回家族とどこかへ旅行に行っていたからな。知らなくて当たり前だ」

「旅行ねぇ……」

二人でスバルの事を話していると、それに気づいたのかスバルがこちらに目を向けてきた。しばらくキョトンとしていたが、急にぱあっと顔を輝かせてタクヤ近づいてくる。

「あ〜！タク兄ちゃんだぁ！！どーしたの、こんなところでっ」

「ユウの姿が見えたから、探していたんだ。しばらく会っていなかったからな」

「ユウと知り合いなの！？」

「幼なじみだよ。……そういえばタクヤ、空から俺の姿が見えてたのか」

「ユウの姿は見えなかったけど、お前のピジョットの姿が見えたんだ。前に一回見たことがあったし。……お前達、これからどこに行くんだ？」

「旅に出るんだよ♪」

「へぇ、スバルももうそんな歳なのか。時が経つのは速いな。通りでユウにもオッサン呼ばわりされるわけだ」

タクヤの言葉に、スバルだけでなくユウも笑っていた。タクヤは昔

から、人を和ませる才能がある。また、面倒見が良いことからもマサラタウンでタクヤの事を知らない子供は無に等しいのだ。

三人はすぐに打ち解けて、たわいもない会話をし続けた。余談だが、ユウのポケモン達はずっと外に出されっぱなしなので、思い思いの行動をしている。唯一ユウの側にいるのは、チュウタだけだ。

「ん？スバルは旅に出るのは当たり前だが、何でユウも一緒にいるんだ？一番道路までの案内か？」

「オーキド博士に頼まれて、俺がスバルのサポート役として一緒に旅をするんだ。ま、別の仕事も任されたけどな」

ユウのその言葉を聞いて、タクヤは仰天した。タクヤは、ユウが一年前に旅を中断させた理由を知っているからだ。

さすがにタクヤは反対しないだろうと思っていたユウだったが、そんな思いとは裏腹にタクヤは首を横に振った。

「ダメだダメだ！！一年前のことを忘れたのかっ！？」

「別に……もう平気だし……」

「そうやって油断してるから、あんなことになるんだぞっ！！少しは自分の身体を労れっ！」

「平気だって言ってるだろ！？俺は絶対行くからなっ！」

「え……なに？何の話？」

あまりの剣幕に、さすがのスバルもたじたじだった。タクヤがこんなに声を荒げることが初めてだったし、なによりもユウがタクヤにここまで反抗していることに驚いたのだ。

一年前何があったのだろうか……。

とりあえず、二人の口論は放っておくことにした。終わるまではチュウタをいじったり、ピジョスケの翼を触ってみたり……。

ようやく終わった頃には、二人は肩で息をしていた。どれだけ激しい口論だったのだろうか。

しばらく二人ともそのままだったが、いきなりタクヤが衝撃の一言を放つ。

「――よしっ、そこまで言うんだったら、しょうがない。だが、おれも連れていけ！」

「……はぁっ！？」

「えっ？タク兄ちゃんも来るの？やったぁー！」

顔をしかめるユウとは対照的に、スバルは両手を挙げて喜んでいる。二対一でユウの負けであった。

「〜っ！分かったよ！！勝手について来ればいいだろっ！」

「最初からそのつもりだ」

「やった、やった、タク兄ちゃんと旅ができる〜！」

ぴょんぴょんとそこらじゅうを走り回り、挙げ句の果てには石につまずいてすっ転んでしまった。慌てて駆け寄るが、すぐに自力でむくりと起き上がって笑い出す。

それにつられて二人も、顔を見合わせた後で笑い出した。

高く昇りきった太陽が、そんな三人を暖かく照らしていた———

こうして、ユウの新たな冒険が始まったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0038o/

仲間との絆†天空の星†

2010年10月10日04時38分発行